



「バッハを演奏することで自分の中の音楽に柱ができた」。こう語るのは福岡市城南区のピアニスト管谷怜子さん(41)。2012年から、バッハが鍵盤楽器のソロ演奏用に書いた作品の全曲演奏に情熱を注いでいる。昨年までで14回を数え、24年まで予定する。

きっかけは偶然だった。11年ごろ、通りがかった同市南区の建物が気になった。「新しいカフェ?」。のぞくと音楽ホールを備えた多目的施設「日時計の丘」だった。以来、時々通ってはピアノを弾いた。

施設所有者の井口正俊さん(83)が「バッハを演奏しませんか」と声をかけた。

FFGホール (福岡市中央区)



ピアニストの管谷怜子さん

「バッハ」に注ぐ熱い思い

「納得いくまで弾き直し、音楽に真剣に向き合っていた」という管谷さんに全曲演奏を提案したのだ。あつまり引き受けた管谷さん。しかし、簡単ではなかった。「バッハの作品は単純に弾くだけで形になる華やかな曲ではない。自分なりの解釈をしないと空っぽの演奏になる」。譜面に

じっくり向き合い、納得いくまで練習を重ねた。9月には関連して、バッハから多大な影響を受けたブラームス、シューマンの作品も取り上げる。「他の作曲家を取り上げることでは、バッハの偉大さが改めて分かる。何度弾いても飽きません」

(鎌田浩二)

メモ 「管谷怜子ピアノリサイタル」は9月11日午後2時から、福岡市・天神のFFGホール。ブラームスの「ピアノソナタ第3番へ短調作品5」、シューマンの「交響的練習曲作品13」を演奏。チケットは一般3000円、学生1000円。問い合わせは管谷さん＝090(1192)0158。

記者のおすすめコメント

自宅にあった電子オルガンで遊んだのをきっかけに、4歳ごろからピアノを習い始

めた管谷さん。バッハ作品は「一つ一つの音の意味を見つけて弾かないと、自分の拙さが出てしまう」面もあるが、それだけに「奥が深い」という。9月の演奏会、そして来年、再来年のバッハが楽しみだ。

端正かつ劇的なもの

九州交響楽団第318回定期（9日、アクトス福岡シンフォニーホール）は、モーツァルトの「魔笛」序曲に始まり、同ピアノ協奏曲「戴冠式」Kv.537を経て、ベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」へ。プログラムの目新しさで集客をめざす楽団が多い中、古典派でまとめた王道プログラムは珍しく、その分、音楽的意欲や創意に期待して出かけた。

ここ数カ月、九響のフルートおよびクラリネットの首席は、才気が奔放さへ走りがちで危惧していたけれども、今回、指揮棒をとったゴロー・ベルクがよくまとめて、期待を上回る格調の高さ。「英雄」第2楽章ではコントラバスの重低音による葬送リズムがさえ、第4楽章では変奏曲を淡々と歌いつないでいく。

協奏曲でソロをつとめた菊池洋子は2002年のモーツァルト国際コンクールの覇者として、ストイックなまでにモーツァルトに絞った探求を続けている。これまでにソナタのほか、協奏曲の録音も二つあって、CDでは井上道義指揮の第20番での透明な寂しさや、沼尻竜典との第21番で示した軽快さが記憶に鮮やかである。今回の九響との

ステージで改めて感じられたのは、一切の見栄をきることなく不動のビートの中で、音のエネルギーだけを膨らませたりしぼませたりする的確な技術だ。それによる造形は、端正かつ劇的なものだった。

ピアニストの優れた技術という点に関し

て、最近もう一つ印象深かったのは、菅谷怜子のピアノシモである（15日、福岡市南区・日時計の丘ホール）。サロンに集う約80人のためにJ・S・バッハの鍵盤作品を数年かけて全曲演奏する企画で、初回は「平均律クラヴィーア曲集」第1巻の前半12曲が披露された。会場に据えられたのはドイツ・ブリュトナー社製のピアノ。

第1番八長調や第5番二長調のフーガでは明るくはつらつとした伸びやかな世界を旅し、第6番二短調の前奏曲ではセンチメンタルに陥ることなく、陰影と叙情性を織る。

18世紀のバッハ作品を19世紀の産物である「ピアノ」で演奏する場合、かつてはペダルや強弱表現を最小限にすることで、チェンバロやオルガンの世界を模写するアプローチが好まれた。一方、菅谷のアプローチは

圧倒的にモダンな方向で、ダンパーペダルで各音間の区切りの滑らかさを増す繊細なレガート踏法から、特定の音を強調する大胆な共振踏法まで、存分に展開し処理しきる。

明瞭に立ち上がった音が徐々に減衰し沈黙に近づく際のピアノシ

モは、指の打鍵でハンマーによる打「弦」を操作するというピアノの基本構造からして、なんらの不思議もない。しかし、第12番へ短調の出だしで、無音から薄霧のように浮かび上がる繊細なクレシエンドは、奇跡的な響きであった。（西南学院大准教授）



栗原 詩子



九響第318回定期公演

わせるものではない。特に響の鈴木浩二は熱演・好新シリーズの場合、その年演。アンコールでは超絶技会費の1回分が定期演奏会 巧も披露した。テューバのそれよりも高額ではなお 魅力と、鈴木浩二という存さらだ。こうなれば芸術性 在とを知らしめた好企画で重視の定期演奏会に期待すもあつた。

小泉和裕が指揮した33響、読響などに所属しソロ活動も行う30歳代前半の若手男性チェリストたち。意欲と創造性を感じさせる企画であり演奏であつた。特にチャイコフスキー《ロココの主題による変奏曲》、ポッパー《ハンガリアン・ラプソディ》、ピアソラ《天使のミロンガ》《アディオスニノ》《リベルタンゴ》の演奏が秀逸。次回公演にも必ず足を運びたいと強烈に思わせた。

ハッハのみによる「管谷恰子ピアノリサイタル (J. S. バッハ クラヴィーア作品全曲演奏会第5回)」（9月28日、F.F.Gホール）も能動的聴衆しか関心を示すことのないプログラムだったかもしれない。しかし《ハルティータ 第一番変ロ長調》、《フランス風序曲ロ短調》や弦楽五重奏の伴奏による《ピアノ協奏曲第一番二短調》などの管谷のハッハにかける一途な思いが結晶化した演奏とその必死な姿に、能動的聴衆のみならず会場の多くが感銘を受けた。揺らぎなどとは対極にある好ましい精確さに満ちた演奏でハッハの魅力を再認識させた。

とプログラフィミング

める意欲的企画を



九響7月定期では、チューバ奏者・鈴木浩二が楽器の可能性を存分に聴かせた = 7月18日、アクロス福岡



全国ツアーを敢行した「クァルテット・エクスプローチエ」 (写真は8月の松山公演)

(作曲家、九州大学大学院教授)